【郷土史への扉】

島津義久公と国分たばこ

「花は霧島　煙草は国分　燃えて上がるはオハラハー桜島」とおはら節の歌詞にもあるように、国分はたばこの名産地として知られています。今回は、"たばこ"とたばこを国分地域の特産品にまで発展させた"島津義久"について紹介します。

一、たばこの伝来

たばこは南米ボリビアのインディオたちが、野生種を吸っていたことにはじまる、という説が有力です。その後、コロンブスのアメリカ大陸発見によって、南米一帯に広まっていた喫煙の風習がヨーロッパに伝わり、やがて全世界に広まっていきました。

日本への伝来については、諸説があり確定的なことはいえませんが、明治十四年に刊行した「薩隅煙草録」には慶長初年のころ（一五九六～）に指宿で初めて植えられたとされています。たばこを喫む習慣はそれよりもっと以前（天正年間・一五七三～）から伝わっていたと思われます。

二、国分たばこの始まり

国分たばこが生産されるようになったのは、慶長十一（一六〇六）年に服部宗重が義久の命で国分の梅木（現在の舞鶴中学校付近）に栽培したことに始まります。

宗重は、天文十六（一五七六）年に伊賀国（三重県西部）で生まれ、その後、天正十四（一五八六）年に義久に仕えました。もともとたばこ好きな宗重は、舞鶴城の近くで採れたたばこが他の物に比べ良質であることを知り、義久の許しを得て本格的に栽培を始めました。

義久がたばこ栽培を奨励した背景には、文禄・慶長の役（朝鮮出兵）や関ヶ原の戦いへの出兵・敗戦、江戸城修築への出費などによって、薩摩藩は財政的に追いつめられていたことが挙げられます。当時、たばこ葉が高価で売買されることから、財政の立て直しと、たばこの栽培を藩内の郷士の専業とすることで、郷士の生活の安定を図ろうとしました。

三、国分たばこが上質な訳

文化十二（一八一五）年に重富の商人が幕府と薩摩藩の許しを得て、国分たばこを江戸に売り込みました。

当時の等級と商標（銘柄）は次のとおりでした。

一等　伊勢ヶ屋敷　二等　車田
三等　砂走　四等　龍王
五等　武元　六等　砂ヶ町

商標の名は、いずれも国分の生産地であり、それほど国分たばこの品質と産地の名は全国的に通用していました。

ではなぜ、国分たばこはここまで品質が良かったのでしょうか。

たばこの花

質の良いたばこ葉を作るためには、生産者の技術の熟練度も必要ですが、たばこを最初に栽培した梅木をはじめ、商標にまでなった地には共通している点があります。それは、その土地が砂地で水はけは良いのですが、肥沃でない痩せた土地であることです。梅木は天降川の中州であり、砂走や砂ヶ町も地名から分かるように砂地でした。

砂地で水はけが良く肥沃でない土地では、たばこの根が大きく張り、植物の本来の能力が発揮されたようです。これも国分たばこ高品質の要因の一つかもしれません。

四、国分たばこの隆盛

国分たばこを江戸に販売することを許された文化年間を皮切りに、その後、大阪、名古屋方面にも販売されました。また、琉球国王から中国皇帝に献上品として天保の末期ごろまで相当量の国分たばこが輸出されていました。

明治初年の相場表によると、産地により高低が激しかったようですが、国分たばこは全国の最高位を占め、明治十年ごろまでは主として葉煙草で出荷していました。

このように、国分たばこは義久が生産を奨励してから現在に至るまで、地域の特産品として受け継がれてきました。昨今、健康増進法や健康志向によって喫煙者の減少とともに、葉タバコの生産も少なくなってきました。

今年は第十六代島津家当主「島津義久公」が没して四百年を迎えます。たばこの栽培をはじめ、琉球や明との交易、城下町の整備などによって、国分の町の経済的基盤は確立しました。私たちは、義久公の成した偉業と先見性をあらためて顕彰するとともに、公の地域への思いを引き継いでいきたいと思います。

文責＝鈴